

プラトーン「知的であること」とは何か ―

Plato and Inteligence

水谷 千鶴子

1. このつらい時代に 一宙返りしてしまった人たち―

自分が求めていたかぎり それは自分を求めていた くとりと宙返ると
自分が求めるものなどなくて 何もない空の空 この無意味なほどの空の
はてしなさを受けていく ひりひりとした存在の痛さよ

高橋たか子『始まりへ』223

1816年、初めてハイデルベルグ大学の教壇に立ったヘーゲルは、今はその苦境から脱したが、それ以前のドイツは、国民にとって「つらい時代であった」と言って「哲学史」の講義をはじめた。

「つらい時代にあっては、日常生活のこまごましたことが大切に思え、現実の高次の利害関係やそれをめぐるあらゆるものに精神的かつ物質的な全精力がそそぎこまれて、もっと高度な内面生活や、もっと純粋な精神活動にむかう心の余裕がなく、すぐれた人びとまでも現実の利害にとらわれ、一部はその犠牲になってしまう。世界精神が現実にとらわれすぎて、自分の内面に目をむけ、内部に力を集中することができないからです」と。(ヘーゲル『哲学史 上巻』3)

しかし今ドイツは変わった。「人びとのきもちが、日々の利害をこえたところで、真なるもの、永遠なるもの、神的なるものをうけいれ、最高のものを考察し把握することのできる時代がきた」のだ。だから学生諸君、君達は「なににもまして学問と自分自身、この二つだけを信頼することです。」(同上 4)

そして今2007年、この日本の知的状況は、ヘーゲルが希望を語った状況からほど遠い。われわれは知的に「つらい時代」を突進んでいるようだ。知的現場では、「いかに生きのびるか」をめぐって迷走し始めている。そこでは「その生きることとは何か」への問いはない。あたふたと「生きのびる術」を追う、その自分を見つめる「目」、「もう一人のわたし」をもつことはない。生きのびることに必死のわたしとは何か、という問いは皆無になりつつある。われわれは「生活」しているにすぎず、「生きている」のではないようだ。特に学知の世界においては、問いを出し、それについて考えることで知・思考の訓練ができるのであ

るが、現状は多くの「愚民なる大衆」を生み出すことに必死であるようにみえる。

このような現状をまえにして、ここでいま一度プラトンを読んでみたい。ヘーゲルが上記の講義において「プラトンと共に学問としての哲学」が始まるといったそのプラトンを。彼こそ見える世界(形而下)から見えない世界(形而上)へと宙返りした人。宙返りして形而上へと目を向けたからこそ、形而下の世界がみえてくる。宙返りして、「ほんとうに真実なるものは何か」「ほんとうに善なるものは何か」「ほんとうに正しいものは何か」を考えようとした人。それらがわからないことがわかった(無知の知)ら、考えなさい。考えるほどにあなたは自由になる、あなた自身が明晰になるのだよ。「一番大切なことは、単に生きることそのことではなくて、善くいきることだよ」と、死を前にしてソクラテスに語らせたプラトン。

プラトンから2400年後の日本を、「イヴェント、イヴェント、と、国をあげて遊んでいる日本」、「文化活動の名のもとに、生きることが虚構化されていく日本」と見極め、プラトンと同様、宙返りして「無限の自己超出」をする高橋たか子と、この日本を「人間が崩れてきた」日本、「人間が痴呆化」し、「目先のことしか見ていない」と嘆き、やはり宙返りして生き、逝った池田晶子の文章と共にプラトンを読んでいこう。学知に携わる者として、「単に生きること」に満ち満ちたこの時代だからこそ、「善く生きることとは何か」を彼らとともに考えたい。

「しかし、だからこそ、彼らは信じるのだ。われわれの善と、われわれの悪とを信じ、踏みこたえてそこに立つのだ。形而上と形而下のはざままで謎を見据えつつ、しかしわれわれの尊厳はここにしかないと知るからだ。私は、このような人々の姿を、限りなく美しいと思う。それこそが、人間の果実であり、おそらくは、祈りのように、魂が最も神に似る瞬間なのだと、私もまた信じている。」

池田晶子『ロゴスに訊け』227

2. 知性 ― 目を覚まして生きる (『国家』『テアイテス』)―

「いったい私は誰なのか？これほど自分をよく知っている私が、そう言い、そう思うのだ。なぜなら、私の中に私を超えるものがあり、そこからの波動が、絶え間なく、私の一瞬一瞬をあらしめているのだから。このを超えるものとは、茫漠とした人類の中身だ。そうしたものが神の強大なエネルギーに乗って来る。」

高橋たか子『この晩年という時』252

国家を治めるべき者は哲学的知を身につけた者であることを主題とし、正義論と国家論から構成される『国家』第5巻において、プラトンは真正面から「哲学者とは・知を愛する者」とは何かを問題とする。第5巻から第7巻は『国家』における圧巻の箇所であるが、その冒頭の第5巻でプラトンは明確に、知を愛する者とその対極にいる者を対比させるの

である。

「真の哲学者とは」と問われたソクラテスは、「真実を観ることを愛する人」、「ものの本性に触れようとする人」と答える。その一方哲学者ではない人を「見物好き」で、「技芸の愛好者や実践家」とする。後者は、「美しい声とか、美しい色とか、美しい形とか、またすべてこの種のものによって形づけられた作品に愛着を寄せるけれども、＜美＞そのものの本性を見きわめてこれに愛着を寄せるということは、彼らの精神には出来ない」人たちである（『国家』401）。それに対して前者は、「＜美＞そのものが確在することを信じ、それ自体と、それを分けもっているものとを、ともに観てとる能力をもっていて、分け持っているもののほうを、元のもの自体であると考えたり、逆に元のもの自体を、それを分けもっているものであると考えたりしないような人」であり（同上 402）、この人たちこそ「目を覚まして生きている」人、「ほんとうに知っている人」、知識のある人であると答える。

「知性ある人」は第6巻に入ると、「節度ある人」、「星を見つめる男」、「公正にして温和な魂」、「心底から学ぶことを好む者」等々と表現される。それに対して、個々の事物にとどまり、「ぐずぐずしている人」、「知性のない人」をソクラテスは、「思わくしている人」となづける。「思わく」つまり「思いこんでいる人」は、「万事思わくしているだけであって、自分達が思わくしているものを何ひとつ、ほんとうに知ってははいない。」だから彼らの思い込みは主観的な思いにすぎない。自分が正しいと思っていることが「本当に正しいことなのか」を彼らは問わない。自分の思わく・ドクサ・意見を彼らは考えない。

こうして、「ほんとうに知っている人」、「誰にとっても正しい」ことを考える知性は、「私を超えるもの」が在ることを確信する。『国家』第7巻では、その「私を超えるもの」、「本当のもの」を求めてゆく人と、それを恐れ、「考えないわたし」ととどまる人が「洞窟の比喻」において語られるのである。

子供の頃から手足を縛られ、洞窟内の前方の壁だけを向いて座らされ、決して後方を観ることが許されない囚人たち。彼らの後方には、火が燃えている。その火と囚人の間には低い壁があり、壁の後方には壁に沿って道がある。そしてその道を人間や物が動くと、その影が囚人達の前方の壁に映し出される。囚人達が見るのは物や人間達の影だけである。そのため囚人たちにとっては、その影がそれらのものの真実だと思いこむ。「奇妙な情景の喩え、奇妙な囚人達の話ですね」と対話相手のグラウコン、「われわれ自身によく似た囚人たちのね」と答えるソクラテス。そしてソクラテスと同じ発言をせざるをえない2400年後の日本の私たち。

さてある日、この囚人の一人が縛めを解かれ、洞窟内の火の光を見ることが許される。しかし彼はこれまで見てきた影のほうが本物だという思いから離れられない。影だけが見える元の洞窟に帰ろうとするが、さらに彼は洞窟の外の太陽を見るために引っぱりだされる。最初は目がくらみ太陽の光を見ることが出来なかったが、徐々に「太陽それ自体」を見ることができるようになる。そしてこの太陽こそが、あの影の原因であり、真に在ると

ころのものだと「わかる」。わかった彼は学ぼうとする。「いったいわたしは誰なのか」と。もはや彼は洞窟内の影に戻ることはしない。わたしはわたしを超えるものがあることを知ってしまったのだから。もはや彼は、「一般にあると思われている雑多な個々の事物の上にとどまって、ぐずぐずしているようなことはない」。彼は、「くまさに何々であるところのもの」と呼ばれるべき、それぞれのものの本性にしっかりと触れるまでは、ひたすらに進み、勢いを鈍らせず、恋情をやめることがない。彼は魂のその部分によって、真の实在に接し、交わり、知性と真実を産んだうえで、知識を得て、まことの生活を生き、はぐくまれて行く」ことになる。」(同上 434)

知性を得た彼は洞窟に残された囚人を解放し、彼と同じように太陽を真に在るところのものを知らせようとする。しかしそうする彼を世間は狂った者と揶揄し、出来たら抹殺しようとする、ソクラテスがそうされたように。

目を太陽に向けることなく、洞窟内から出ようとしないう者たち、したがって思慮せず、知性に無縁の者たち、彼らは「く下へ」と運ばれてはまたふたたびく中へ」のところまで運ばれるというようにして、生涯を通じてそのあたりをさまよいつづけるもののようだ。彼らはけっして、その領域を超えて真実のく上へ」のほうを仰ぎ見たこともなければ、実際にそこまで運び上げられたこともなく、また真の存在によってほんとうに満たされたこともなく、確実に純粋な快樂を味わったこともない。」(同上 671)彼らが見る世界は、洞窟内の影だけが見える世界、まさに「見える世界」のみ、しかし「見える世界」の背後には「見えない世界」、「思惟によって知られる世界」こそが真の世界だと、ソクラテスは洞窟の比喩で語っているのである。

「知識とは何か」と正面から問いだす『テアイテトス』においてもソクラテスは、知識とは何々の知識といったものではなく、「何々」そのものとは一体何かを問うのが知識だと答える。「従って、知識をだね、何か？と問われて、何か技術の名前を答える者があるならば、その答えは笑止な答えなのである。」(『テアイテトス』25)そしてこうした事例的な、「見えるもの」だけを知覚する者を「外道の者」とする。「この連中ときてはしかし、自分たちの手でしっかりとつかめるものでなければ、何ひとつだってあるとは思わないんで、作用だろうが、生成だろうが、目にみえないものはいっさい、有の部類に入ることを肯なわぬやからなんだからね。」(同上 51)

直接経験するとは、自分だけの知覚・感覚にとどまることである。自分だけに知覚される相対的思考を正しいと「思いなす者」を、ソクラテスは「知性ある者」とはしない。知性への歩みは、自然的・感覚的なものから離れることによって始まり、解放された奴隷が太陽を目指すように、知性が真に在るもの・普遍なるものを目指すとき、知性は「理性」という別名をもつことになるのである。

「自分が思っているだけのものを『意見』と呼ぶとすると、君が持たなければならない

のは『意見』ではなくて『考え』だ。『自分が思っているだけの自分の意見』ではなくて、『誰にとっても正しい本当の考えだ』。『考え』は、ただ自分が思っていることは違う。自分が思っていることは本当に正しいか、誰にとっても正しいか、これを自分で考えてゆく、このことによってしか知られない。『思う』ことと『考える』ことは、全然違うことなんだ。君は、ただ自分が思っているだけのことを意見として言う前に、それが誰にとっても正しいかを、必ず考えなければならないんだ。」

池田晶子『14才の君へ』49

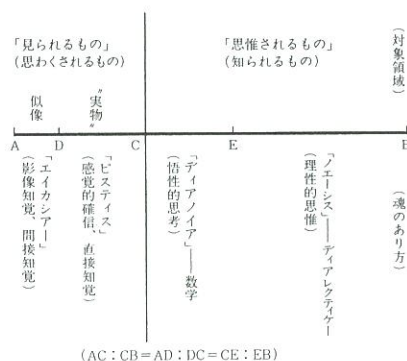
3. 理性 一思考を思考する(『国家』「線分の比喩」)

「内へ内へ遡っていくと はてしない砂漠が見え そこを歩いていく群れあり
何世紀も何世紀も昔から 今なお歩きつづける 人々の、歩行が見え 時を超えて
歩いているので 今日、このぼくが 二十世紀という時にいて 貧しきなればなる
ほど 参加できる、群れがあるので ぼくは孤りではなく 貧しくなった人々の歩
行が ここ、大地の奥に 耳をすますと聞こえてき 探し行く熱い息が 永遠か
ら永遠へと 大きく、こだましていて 行き先は何処って訊ねると たった一つの
答えが 大きく、こだましてくる 始まりへ、と (中略) ほら、みんな、二十一世
紀へ二十一世紀へとすすんでいますね。それとは、まったく逆の方向です。」

高橋たか子『始まりへ』254

考えること・思考の対象が有限な対象に限られているかぎり、思考の自由は有限である。思考が有限であるということは、わたしの存在も限定されたものであり、自由に羽ばたくことは不可能だ。目を覚ました意識(知性)が、「わたしを超える」とき、「わたしは自由である」という意識(理性)がわたしを満たす。その時わたしは、あの特殊なわたしの主観性から解放され、「意識の偶然性、思いつき、恣意、こだわりを追放し、自分の内奥にひらかれた世界を、絶対的なものをもたねばならない。」(ヘーゲル 373)そのときわたしは普遍で無限大の世界とつらなる。普遍で無限大の「わたし」へと創造される。「わたしは普遍である」ことを知る。わたしは理性的な人間になる。わたしはわたしの内に、わたしを超越した存在を確信する。

プラトンは、こうした自分だけの思い込みから、絶対的なもの、普遍的なものへの知の歩みを、ソクラテスに『国家』第6巻の「線分」の比喩で語らせる。(次図参照)。



藤沢令夫『プラトンの哲学』128頁より

「見られるもの・思わくされるもの」の線分上のACは、洞窟内の影(AD)と洞窟何を動く人間や物(DC)に対応する。この影・似像と実物の比例はどちらが真実に近いかという「真実性の有無の度合い」に対応する。さらにこの比例は、「思惟されるもの・知られるもの」の線分上のCEとEBへの比例にも対応する。そしてこの関係は線分全体の「見られるもの」と「思惟されるもの」の「真実性の有無」の比例でもあるのだとソクラテスは語る。

われわれの知の歩みは、いまやAC(可視界)からさらに進みCBの線上の入り口に立っている。ではCB・知の世界のCEとEBの違いは何であろうか。CBの線上においてはその線上を動くものは魂(精神)であることを前提として、ソクラテスは、CEとCBの違いを次のように説明する。CEは「魂(精神)」がそれを探求するにあたって、先の場合には原物であったものをこの場合には似像として用いながら、仮説(前提)から出発して、始源へさかのぼるのではなく結末へと進んでいくことを余儀なくされる。これに対して、もう一方のもの[EB]の探求にあたっては、魂(精神)は仮説から出発して、もはや仮説ではない始源へおもむき、また前者[CE]で用いられた似像を用いることなしに、直接<実相>そのものを通じて、探求の行程を進めていくのだ。」(『国家』486)

しかしこの説明がよくわからないグラウコンはさらに説明を求める。そこでソクラテスは数学を例にして先ずCEを説明する。数学で扱う数や図形などは、既に知られたものであり、それらを仮説として整合的に論をすすめるが、その際その仮説の根拠を問うことはない。今日それが万能である科学的思考とはまさにこの領域の悟性的思考のことであろう。

これに対してEB(理性的思考)は、仮説は用いるが、仮説を「踏み台」としてさらに上方へと進み、「万有の始源」にまで到達しようとする。「そしていったんその資源を把握したうえで、こんどは逆に、資源に連続し続くものをつぎつぎと触れたどりながら、最後の結末に至るまで下降して行くのであるが、その際、およそ感覚されるものを、補助的に用いることはいっさいなく、ただ<実相>そのものだけを用いて、<実相>を通して<実相>へと動き、そして最後に<実相>において終わるのだ。」(同上 488)

実相・アイデア・普遍なるものは、「洞窟」の比喩の太陽である。解放され自由になった囚人が洞窟内で「思わくされる」事物が似像にすぎないことを知り、真実なるもの、似像の始原である太陽を目指すように、自由になった知性は普遍なるものをめざして、その知性(思考)を思考する。理性とは思考を思考することである。

目を覚まして生きることを自覚した人間・自己意識に目覚めた者は、「自分の人生にとって何をしてゆくか」「何に価値をおくか」「何が自分にとって最も重要であるか」、すなわち「どのようにして一つにまとまるか」を問わねばならない。それは「テロス(最終目標)のもとに関心事を統一すること」である。(ジュリア 65)そしてこのテロスとは、わたしだけの特殊な目標ではない。すべての人に共通のテロス・ロゴスでなければならない。

万物に共通の目的をめざして、わたしは「新しいわたし」を創造していく、「新しいわたし」に「成っていく」その思考が理性である。無意識のわたしから意識されたわたしへ、そして、意識されたわたしをさらに意識する「わたし」の意識・自己意識の創造、感覚的な、無邪気な「直接的自分」を超えなければ、直接的自分が死ななければ、「わたし」という普遍なる者は創造されないのだ。それは「死ぬことによって本当に生きること」(高橋たか子)である。理性とは、直接的な身体・感覚をはなれた魂が、真実在(アイデア)むかう思考の歩みである。

「自分で考えるほどに人は自分の主張を失う、いや正確には、『自分』というものを失ってしまう。なぜなら、関心は本当のことを知ることにあり、自分を主張することにはないからです。そういう人が、なぜ独善に陥ることがあるんですか。

考える人が自分を失うとは、言ってみれば、考えることにおいて理性そのものと化すからで、理性というのは普遍性の別名です。本当のこと、すなわち真実を知るために(神によって)人間に与えられた精神の機能であり、これを正しく使用することで、すべての人は、個別的な自分を超えて普遍的な真実に到達することができます」

池田晶子『暮らしの哲学』142

4. 魂 —「魂としてのわたし」(『パイドン』)—

「私が日本人だなんて偶然のこと、私にこれこれしかじかの経歴があったなんて偶然のこと、と思える。

そもそも、人とは誰だろう？

肩書・財産・身分・役割・仕事・人間関係・学歴・経歴などなどで、自分はこういう者だと思っている。また、夢や感情や欲望などで、自分はこういう者だと思っている。

それだけのこと、まったく。

からっぽな自分の、このひろびろとひろがりわたる自由さ。ひとときでも、それは救済な

のだろうか。」

高橋たか子『土地の力』279

われわれが肉体のもつその限界に囚われているかぎり、真実を求める自由な思考は不可能である。自由な思考のためには、できるかぎり肉体から離れなければならない。肉体的なわたし個人の「肩書き・財産・身分・役割・仕事・人間関係・学歴・経歴」等々を通しての思考は、「ただそれだけのこと」。また眼や耳その他の感覚による考察は、「いろいろの事物のうちにその度ごとに異なった姿」で現れるものであって真なるものではない。これに対して「なんであれ存在するもののうちでそれ自体として独立にあるものを、魂が自分自身だけで理性的に把握しようとするならば、魂は自分自身以外のなにものも信じないようにと励ますのである。」(『パイドン』85)

ではわれわれはいかに肉体的限界から離れるのか。われわれが肉体を離れる時は死のときである。死によって肉体と魂は分離するのであるから、魂は死によって肉体・感覚の持つ限界を離れることができる。とするならば、死によって「真なるもの」へ近づくことができるのだからわれわれは死を恐れ嘆く必要はない。むしろ思考する者は死を練習しなければならない。生きているときもできるだけ死に近い生き方、「現在においても将来においても、足枷のごときものである肉体から解放されて、魂ができるだけ自分自身だけで単独に生きるように習慣づけること」に励まなければならない。(同上 37)

こうして思考する者(哲学する者)は、できるだけ肉体・感覚から離れ、魂に近づかねばならない。魂に向きを変え、思考すること、それが「哲学者の仕事」である。その哲学者の仕事、「思考がもっとも見事に働くときは、これらの諸感覚のどんなものも、聴覚も、視覚も、苦痛も、なんらかの快樂も魂を悩ますことがなく、魂が、肉体に別れを告げて自分自身になり、可能な限り肉体と交わらず接触もせずに、真実在を希求するときである。」(同上 32)。

肉体をもって生きているが、しかし「からっぽな自分」という「魂のわたし」、この土地の、この子の、この親の、この職場の、この愛憎を持った、この現実生きるわたしがまた「誰でもないわたし」、「魂としてのわたし」でもあること、特殊でもあるのに、普遍でもあるという、このわたしであってわたしでないという「わたしの」の存在。真実在・イデアをめざした「魂としてのわたし」は、空になって限りなく自由である。

「ちょっと説明的に言うと、人間はいろいろなレベルを一人の個人が持っています。つまり、個人の某としての存在、あるいは社会的存在としての自分、それぞれのレベルがあります。その逆の側に、心としての、魂としての自分というレベルがあります。魂のレベルは、当然宇宙的なものにふれていきます。宇宙的存在としての自分のレベルがあります。で、存在の究極というところにやがて行きます。存在の究極というのは、究極の混沌であることを裏返しすると、空ですから、空の側から言えば、これはもう何でも語れるという

ことになります。」

池田晶子『人生のほんとう』172

5. アイデア—普遍なるものへ(『パイドン』『パイドロス』『饗宴』『テアイテトス』)—

「何処へ行くのかは 火のようにはっきりしている 砂漠を通りつつ砂漠となって
自分のうちに垂直に降りていく 先の先の火の国へ 行くのでなく帰っていく
(中略)水平に行きながら同時に垂直に降りていく、という神秘的な道なのである。」

高橋たか子『土地の力』132

「どんな存在や正当性をもうたがいうる最高の自由」(ヘーゲル)をもった魂は、アイデアをめざして垂直に、無限に歩み続ける。その魂の持つ二つの本性—「魂の不死」と「真実在に登りつめる魂」—を正面からソクラテスが語るのが『パイドロス』である。先ずそこでは、魂が「自分で自分を動かすもの」であり、「他のものによって」動くものではないことが明言される。

「魂はすべて不死なるものである。なぜならば、常に動いてやまぬものは、不死なるものであるから。しかるに他のものを動かしながらも、また他のものによって動かされるところのものは、動くのをやめることがあり、ひいてはそのとき、生きることをやめる。したがって、ただ自己自身を動かすもののみが、自己自身を見ずることがないから、いかなるときにも決して動くのをやめない。(中略) 自分で自分を動かすものは動の始原であり、それは滅びることもありえないし、生じることもありえないものなのである。」(『パイドロス』56) それゆえ「自分で自分を動かす」魂は不死であると。不死とは無限に歩みつづけること、際限のないこと。「魂の際限を、君は歩いて行って発見することが出来ないだろう、どんな道を進んで行ったにしてもだ。そんなに深いロゴスをそれは持っている。」(ヘラクレイトス)

さて際限なく進む魂は、「天のかなたの領域」・「真の意味においてあるところの存在」であるアイデアをめざす。『パイドロス』におけるこの場面は、天空に向かう魂を、二頭の翼を持った馬と、その手綱を取る翼を持った一人の御者の姿に譬えて語られる美しい箇所である。そこでは天に向かおうとする馬と、その反対に地に、下界に落ちようとする馬を、いかにアイデアに向けて歩ませるか御者の格闘が語られる。格闘の結果、天空にのぼり、真実在を目にした御者(魂)が、天空をめぐる道において観るものが「真の意味においてあるもの」である。

天に垂直に登っていった魂は、天空の一巡りのなかでこのアイデアを観想するのであるが、魂は地上に戻ってから、天空で観たあのアイデアを思いだし、それによってこの世界、この現実を知ろうとする。この世界の現実のなかに、あのアイデアがあること、アイデアとは現実であり、現実はいdeaであることを確信する。現実はいdeaがあるから現実なのである。

目に見えるもの・現実、現実を超えた、見えないものがあるから現実である。

それはまた、現実のなかにある「多なるもの」は、あのアイデア、「一なるもの」であり、「一なるもの」の理念が「多なるもの」に分有されていることでもある。「学ぶ」ということはあのアイデアを想起することなのである。われわれが或るものを見てそれが「美しい」、それが「正しい」、それは「等しい」、それは「善い」と考える時、われわれはそれらそのもの、すなわち、「美そのもの」「正義そのもの」「等しさそのもの」「善なるもの」の知をすでに先験的に獲得していない限り、それらがそうであるとはいえないからである。

こうして、「人間がものを知る働き」とは、真実在・アイデアを正しく想起することで現実を知ることである。こういう人が「言葉のほんとうの意味において完全な人間」なのであるが、「しかしそのような人は、ひとの世のあくせくしたいとなみをはなれ、その心は神の世界とともにあるから、多くの人たちから狂える者よと非難される」と、現在と全く変らぬ状況をソクラテスは嘆く。しかしこの狂気こそ「もっとも善きものであり、またもっとも善きものから由来するものである。そして、美しき人々を恋慕する者がこの狂気にあずかるとき、その人は「恋する人」(エラステース)と呼ばれる」のである。(『パイドロス』67)

「恋する人」は、「知者と無知者の中間にある者」、デーモン、エロスをもった者、「愛知者」として『饗宴』に登場する。彼らは「人間から出たことを神々へ、また神々から来たことを人間へ通訳しかつ伝達する」ものである。(『饗宴』107)そしてこの人たちの対極にるのが「俗人」、「ある固体の美に隷従し、その結果、みじめな狭量な人」である。これに対して「愛知者」は、人間と神との間にいる者、「減ぶべき者と、減びざる者」との中間者。だから彼らの精神は垂直に神に向かうのである。

しかしこうして知を愛する者は、「真なるもの」を求めて、狂った者といわれようとも、「美へ向かうある唯一無類の認識」の歩みを続けることになる。先ずは自分自身のなかで、「自分が自分に問いかけたり、答えたり、そしてそれを肯定でしたり、否定でしたりする問答(すなわち言論の語り分け)」(『テアイテトス』161)によって、そして他者と自分との間での対話によって、純粹なる思考を続けるのである。

「新しき宗教性は、だから、いまや『宗教』という言葉で呼ばれるべきではない。それは『宗一教』ではない。教祖も教団も要らない。それは信仰ではない。それは、最初から最後までひとりっきりで考え、られるし、また考える、べき性質のものなのだ。だからその新たな名称は、

垂直的弧絶性、とか

凝縮的透明性、とか

そんなふうな響きをもった、何を隠そうその名は、『哲学』なのである。」

池田晶子『残酷人生論』107

6. 対話 — 言葉を蒔く(『国家』『パイドロス』『ゴルギアス』) —

「自我がなくなるわけではない。(中略)自我は在る。これが『私』だという取り換えのきかぬものとして、在る。にもかかわらず、自我が、あの深み深みへと沈黙をひろげているものに呑みこまれて、沈黙している。言葉は、そこから出、同じ沈黙を宿している相手の中の、その沈黙へ、はいる。」
高橋たか子『どこか或る家』192

深みへと、あの「太陽」へと向けられた知性的思惟・理性によって目ざされる「本曲」としての学問。その「本曲を演奏するのは、哲学的な対話・問答にほかならない。」(『国家』第7巻)、その終幕においてソクラテスは、「洞窟の比喩」で魂の向きを変えた奴隷が思索する知の方法は、「哲学的問答法(ディアレクティケー)」であると明言する。

「ひとが哲学的な対話・問答によって、いかなる感覚にも頼ることなく、ただ言論(理)を用いて、まさにそれぞれであるところのものへと前進しようとして、最後にまさに<善>であるところのものそれ自体を、知性的思惟のはたらきだけによって直接把握するまで退転することがないならば、そのときひとは、思惟される世界(可知界)の究極に至ることになる。」(『国家』536)この行程がディアレクティケーであり、学問の本曲を奏でる「知の方法」である。

「真にあるもの」、普遍的なるものへと歩みだす時には、わたしはその特殊性ゆえにもつ有限性を否定しなければならない。わたしの特殊な存在を否定し、他者の存在と統一されることで、新しい「わたし」に成る。ディアレクティケーとは、「在る」、「無い」、「成る」へと「生成」することである。「存在」から「生成」へ、真理は「成って」いくところにある。しかしそれは特殊な存在を「捨て去って」、普遍へと生成することではない。「わたし」は、特殊であるとともに普遍的存在なのである。「端的に対立する観念が一つにむすばれ、『なる』のうちには、存在と非存在がともにある。」(ヘーゲル『哲学史 上巻』269)生成して一なるものとなった真理・ロゴス・「存在」は、「一緒に把握されるもの、それは全ったきものであると共に全からざるもの、一致するものであると共に一致せざるもの、相和するものであると共に和し難きものである。凡てのものから、一つが出て来、また一つから凡てのものが出てくる」(ヘラクレイトス)ものである。

『小論理学』において、ヘラクレイトスから学ばなかったものは何も無いと言い切るヘーゲルは一と多の関係を次のように語る。

「『一がある』という命題のうちには、『一は一でなく多である』という命題がふくまれ、また逆に、『多がある』という命題には、『多は多でなく一である』という命題がふくまれます。一と多は問答法的(弁証法的)なものであり、本質からして相手と統一されているものであって、そこに真理がある。『なる』はその一例で、『なる』のうちには『ある』と『あらぬ』がふくまれ、両者の真実が『なる』であり、両者は不可分にして同時に区別さ

れるものとして統一されている。」(ヘーゲル『哲学史 中巻』66)

「多から一への」と「一から多への」、対立と統一は『パイドロス』で、「分割」と「総合」の手続きとして登場する。「多様にちらばっているものを綜観して、これをただ一つの本質的な相へとまとめること」(綜観)と「さまざまな種類に分割する」というこの方法を実行できる人は「ディアレクティケーを身につけた者」であり、その能力のある人をソクラテスは、「神のみあとを慕うごとく」追いかける人であるとパイドロスに語っている。

それそのものは何か、ものの本質は何か、を問い求めるディアレクティケー・対話は、普遍なるもの・共通なるもの、真理としてのロゴス・言葉への信頼が無ければ成立しない。「真実らしくみえるもの」を求める技術では真実はみえない。対話と弁論術の違いを語る『ゴルギアス』では、弁論術は「説得のこつ」にすぎず、「何が善であり何が悪であるか、何が美であり何が醜であるか、何が正しく何が不正であるかといったことがらそのものに関する知識なしに、ただ、そうした問題についての説得法だけを工夫して、それによって無知な人々のあいだで、じつは自分はその知識をもっていないのに、識者よりもっと知識があるように見せかける」、見せかけの術にすぎないとソクラテスは語っている。(『ゴルギアス』251)「人にそれと信じこませる」技術、「料理法のような」経験をソクラテスは知識としない。特殊な経験に満足しては、わたしは特殊な存在・で終わることになる。それで満足しては、普遍的「わたし」への生成はない。

言葉・ロゴス・真理をとおしてこそ見いだす「わたし」。「私にではなくて、ロゴスに聞いて、万物が一つであることを認めるのが、智というものだ。」(ヘラクレイトス)知の本質をついたヘラクレイトスの断片に支えられて、われわれは自らの魂に言葉・ロゴスの種を蒔く、わたしと対話相手に共通の言葉の橋を架ける。その言葉の力を持つことが出来たとき、それはわれわれにとって最大の幸福なときであるとソクラテスは語る。「…ひとがふさわしい魂を相手に得て、ディアレクティケーの技術を用いながら、その魂の中に言葉を知識とともにまいて植えつける」とき、「その言葉というのは、自分自身のみならず、これを植えつけた人をもたすけるだけの力をもった言葉であり、また、実を結ばぬままに枯れてしまうことなく、一つの種子を含んでいて、その種子からは、また新なる言葉が新なる心の中に生れ、かくてつねにそのいのちを不滅のままに保つことができるのだ。そして、このような言葉を身につけている人は、人間の身に可能なかぎりの最大の幸福を、この言葉の力によってかちうるのである。」(『パイドロス』139)

ロゴスとは対立するものの和解。そのロゴスへの信頼。2500年以上も前の知の探求者によるロゴスへの絶対的信頼を、われわれは今なお真摯に聴かねばならない。

「人がロゴスを獲得するのは、したがって、その正しさを主張すべき自分というものをずてることによってのみだ。自分の正しさを主張するための言葉は、定義により、正しくはあり得ない。言葉をして語らしめることにより、人は自ずから正しい人になるのである

る。この事態をもって『ロゴスに乗りうつられる』と私は呼んでいる。」

池田晶子『人間自身』87

7. 教育 ―魂の向き変え(『国家』『ソクラテスの弁明』『テアイテトス』)―

「これは、いったい何、この内的苦しみは？ 宙返りしたからよ。 何だって？
宙返りは、苦しみ。 そうか、そうか、わかるようでわからない。 自分中心から、
くると百八十度、神中心へ。 ずいぶん前から、そうしてるつもりだけど。
そう、そう、反復を断った時が、宙返りの始まりだった。(中略) 自分が、求めていた限
り、それは、自分を求めていた。百八十度するとは、それではない。あちらを向いていた
のに、こちらを向くなんて、身の裂かれるようなこと。(中略) 宙返りとは、自分におい
て死ぬ。 一生かかるぞ。 . 一生だって？ けれども、苦しみと至福とは、表裏
をなす。 そうだった、そうだった。 どうぞお元気で。 苦しみは入口。
至福への入口。」

高橋たか子『始まりへ』219

二十一世紀のわれわれ大衆社会の知はいかなる状況にあるのだろうか。『国家』でソクラテスが語る2400年前のそれと変っているのだろうか。ソクラテスはソフィストによる教育を批判する。ソフィストのほどこす教育内容は、「多数者の通念以外の何者でもなく」、それを「知恵」として教える教育者は、それを技術の形で教え、「何が＜美＞であり＜醜＞であるか、何が＜善＞であり＜悪＞であるか、何が＜正＞であり＜不正＞であるかについて、真実には何ひとつ知りもせずに」(『国家』441)教える「まことに奇妙な教育者」、「動物飼育者」と変らぬものであると嘆く。しかも彼らはその教育を言葉で説得できないときは強制力を持って行うのである。「君は知らないのかね―彼らは自分たちの言うことを聞かぬものに対して、市民権を剥奪したり、罰金を科したり、死刑にしたりして、懲らしめるものだというのを？」(同上 440)死刑は論外としても、罰金や市民権剥奪は、今日なお常用されている強制力ではないだろうか。それともわれわれは、強制力とも思わずに、多数者の通念を受け入れているのだろうか。

自分が何ひとつ知らないことに気づかない教育者にゆだねられる教育、それはソクラテスが考える教育ではない。ソクラテスは、自分が知らないことを気づかせるのが、教育であると考えていた。プラトンの対話編でソクラテスは、対話相手がそれを知らないということを知らせて(無知の知)、相手がさらに知りたいという欲求をもち、対話相手が知の探求を願いそこに喜びを見いだしていくように導く。それがソクラテス・プラトンの教育であった。正義について、道徳についてわたしは何も知らない、だからそれについて考えていこう。考えることによって「魂をできるだけすぐれたものにしていこう」、そうした自覚をうながすことそれがソクラテスの教育であった。「魂の探求のない生活」「吟味のない

生活]をしていたら君達は「それからの一生を、眠りつづけことになるでしょう。」(『ソクラテスの弁明』田中訳 437)君達はそれでいいのかい？

互いに言葉を交わしながら自分自身に内省し、自分のなすべきことことを考え、自分にとって、世界にとって「善なるもの・善きこと」を考えていくための言葉のやり取り・対話によって、人は「道徳的」になっていくのである。だから道徳的人間とは、「道徳とは何か」を知らないからこそ、自ら「道徳的生き方」を考える人間である。今日の道徳教育のような、規律を守る人間を教育することでは決してなかったのである。「魂のなかに知識がないから、自分たちが知識をなかに入れてやる」ことが教育ではなく、洞窟内から出た囚人が「思惟によって知られる世界」へと向きを帰るように、魂の向きを「生成流転する世界から一転させて、実在および実在のうち最も光り輝くものを観ることに耐えうるようになるまで、導いてこと」が教育である。だから教育とは魂の「向け変えの技術にほかならない」のである。(『国家』502)

無知なわたしを知ったから、実在のうちで最も光り輝くもの(それは<善>であるとソクラテスは主張する)を求め、善く生きる思慮ある人に成っていこう。「一番大切なことは単に生きることそのことではなくて、善く生きることである」、(『クリトン』74)このことを人が自覚できたとき、教育の試みは成功したといえるのだろうか。

「生活のための教育は、人生のための教育ではない。生活のための教育しか受けなかった人間は、生活のために生きることしかできない。いかに生活するかは知っていても、生きるとは何なのかを知らない大人は、たんに先に生きているだけであって、何を知っているわけでもない。このことを知っているから、私は子供に教えたりしない。教えるのは、自分がいかに知らないか、これだけである。」

池田晶子『人間自身』54

8. 水平的であり、垂直的であること

われわれは今日、水平的かつ日常的関心、すなわち「いかに生活・生存するか」に夢中になって生きている。知的訓練の場であるはずの教育の現場でも「生きのびる術」は教えるが、「生きること」すなわち自分と向きあって、その「自分とは何か」考える言葉・ロゴスを身につける知の訓練は日々衰退している。そもそも、知的訓練を担う側が、「おしゃべり」ではなく言葉・ロゴスをもっているのだろうか。言葉をもって、自分と世界に向きあっているのだろうか。学的知が衰退していく学問の場、「われわれの無教養ぶりはそれほど情けないところまできているのだよ」とゴルギアスに嘆いたソクラテス。これは今日の日本の嘆息でもあるはずだ。だからこそわれわれは、「正義をはじめ、そのほかの徳をおさめつつ、かつは生き、かつは死ぬという、このような人生のあり方こそが最もすぐれたものであると」信じ生きた、ソクラテス、プラトンから学ぶことは大きい。(「ゴルギア

ス」405)

特殊なわたし。日常のわたしのいる水平的居場所にいながら、真実なるものをめざして、プラトン、高橋たか子、池田晶子、彼らはみな垂直的精神の持ち主であった。「わたし」のレベルから「わたしたち」のレベルへ、水平でありながら、垂直的であろうとしていた。水平と垂直の交差(CROSS)するところで、「存在の井戸」の底なき底にある神に向かった高橋たか子。「人類的交わりと君の言うものでは、足りないよ。君の言うそれは水平だけのものなのだ。垂直のものがあってはじめて、人類的交わりになる。」(『始まりへ』32)

なぜわたしは存在するのか、なぜわたしは、この肉体をもった特殊なわたしであるのに、魂のわたしは非人称の「誰でもない」のか。その「存在の零地点」にたった時、わたしのなかに「すべての人がわたしである」という、「永遠性」への自覚が(この自覚は高橋たか子の神の自覚であろう)起きないか。この自覚をもったとき。人は「生きる姿勢」が変わる、強く生きられると池田晶子は確信する。17才の読者から来た手紙を紹介しつつ彼女は彼らに希望を託す。「この人は、その普遍的な倫理性の確信というものを掴んでいる。『ほくの』というのが、同時に『全人類の』という言葉とつながっている。直結していますね。(中略)この種の、いわば垂直的な精神というのは、社会の地平ではまず理解されません。社会の地平というのは生活がすべてですから。けれども若い人の方が、こういう垂直性に確実に近いはずです。こういう人たちに期待したい。そしてこういう新しい人たちが現われているところに、希望がなくはないのかなという気がします。」(『人生のほんとう』188)

水平的地平に生活しながら、その生の視線は普遍をめざし、垂直的精神を持続すること、そうした永遠なるものへとみずからの魂を鍛えること。学問的知は、その定点を離れてはありえないはずだと信じたい。

【参考文献】

プラトン

- 『テアイテトス』、2000、田中美知太郎訳、岩波文庫
- 『国家』、1999、藤沢令夫訳、『プラトン全集Ⅱ』所収、岩波書店
- 『パイドン』、2002、岩田靖夫訳、岩波文庫
- 『パイドロス』、1993、藤沢令夫訳、岩波文庫
- 『饗宴』、1992、久保勉訳、岩波文庫
- 『ゴルギアス』、2001、藤沢令夫訳、『世界の名著 6 プラトン』所収、中央公論新社
- 『ソクラテスの弁明』、2001、久保勉訳、岩波文庫
- 『クリトン』、2001、久保勉訳、岩波文庫
- 『プロタゴラス』、2006、藤沢令夫訳、岩波文庫
- 『ソクラテス以前哲学者断片集 別冊』、1998、内山勝利編、岩波書店
- 『初期ギリシア哲学者断片集』、2005、山本光雄訳編、岩波書店
- ジュリア・アナス、『古代哲学』、2004、瀬口昌久訳、岩波書店

G.W.F. ヘーゲル、『哲学史講義』上巻(1998)、中巻(1999)、下巻(1999)、長谷川宏訳、河出書房新社

藤沢令夫、1998、『プラトンの哲学』、岩波新書

熊野純彦、2006、『西洋哲学史 古代から中世へ』、岩波新書

納富信留、2002、『プラトン、哲学とは何か』、NHK出版

高橋たか子

『神の飛び火』、1986、女子パウロ会

『土地の力』、1992、女子パウロ会

『『内なる城』について思うこと』、1992、女子パウロ会

『始まりへ』、1993、女子パウロ会

『亡命者』、1995、『偶像』1995年8月号所収、講談社

『私の通った路』、1999、講談社

『君の中の見知らぬ女』、2001、講談社

『この晩年という時』、2002、講談社

『きれいな人』、2003、講談社

『怒りの子』、2004、講談社文芸文庫

『どこか或る家』、2006、講談社文芸文庫

池田晶子

『事象そのものへ』、1991、法蔵館

『メタフィジカル・パンチ』2005、文春文庫

『さようならソクラテス』、1997、新潮社

『残酷人生論』、1998、情報センター出版局

『考える日々』1998、毎日種出版社、

『考える日々Ⅱ』、1999、毎日出版社

『考える日々Ⅲ』、2000、毎日出版社

『2001年哲学の旅』、2001、新潮社

『ロゴスに訊け』、2002、角川書店

『14歳からの哲学—考えるための教科書』、2003、トランスビュー

『あたりまえなことばかり』、2003、トランスビュー

『人生のほんとう』、2006、トランスビュー

『知ることより考えること』、2006、新潮社

『14歳の君へ どう考えどう生きるか』、2006、毎日新聞社

『君自身に還れ 知と信を巡る対話』(共著者 大嶺顯)、2007、本願寺出版社

『人間自身、考えることに終わりなく』、2007、新潮社

『暮らしの哲学』、2007、毎日出版社